

議長（中田文夫君） 5番 竹島ユリ子君。

5番（竹島ユリ子君） それでは、通告してある2点について質問いたします。

質問の第1点目は、教育的観点から人間の幸せの原点について、教育長の考えをお聞きいたします。

人間として、生きる力が崩壊されつつある今日、人と人との連携や心のつながりは消え、すべては金銭で片づけられるいびつな社会現象において、つつい子どもたちに対しても、私たちは物を与えることが愛情の表現と錯覚してしまっていることが少なくありません。しかし本当に大切なことは「心のつながりとしつけ」ではないでしょうか。

もし、私たち自身が周囲の人たちから大切にされ、また同時に社会の人たちに対しても自分の家族のように思うことができたなら、恐らく私たちの心はもっともっと豊かになると思います。反対にこの人と人とのつながりが切れたとき、私たちの心は崩壊します。この心の崩壊が大きな要因となり、心と心のゆがみが横行し、いじめという形で社会的現象になっていると思われてなりません。

ある新聞のコラムですが、これからの社会で求められる学力、能力などをどう育成するか、その可能性と限界をテーマにして行われたシンポジウムの記事が取り上げられていました。その一節に「複合体と学校づくり」というテーマでの実践報告があり、「地域での学びを核としての新しい学校づくりを提唱しておられ、学校は地域の共有財産であり、今後の教育は、地域挙げての協働作業が一層促進される場が変わろうとしている」と記されておりました。

今、私たちは次代を担う子どもたちに何を伝えていかなければならないのでしょうか。しかし、このことを考える以前に、しつけをしなくてはならない立場の親が、子ども時代にしつけをされずに大人になったという現実が見えてきます。終戦を境にして、ものの見方、考え方が一変したため、当時の親は自信を持ってしつけが果たせなかったのではないのでしょうか。

このように十分なしつけを知らずに成長し、親となったわけですから、親から伝承されなかったしつけを子どもにすることができないという基本的な問題が介在してきます。であれば、子どもたちに教える前に、まず親がしっかり学ぶことも必要不可欠なのではないのでしょうか。

子どものしつけには、「怒る」と「叱る」の違いをはっきり認識させ、親の感情で怒るのではなく、間違いを正し、育む親の愛情で叱ることが、本来のしつけだと私は思いま

す。それが親と子の信頼関係を生み、家庭生活を豊かにするのではないのでしょうか。

人間の幸せの原点である心の豊かさを考えると、心のつながりは、家庭生活を中心としたしつけと、学校でのしつけの融合にあるのではないのでしょうか。

いま一度、教育的観点から「心のつながり」と「しつけ」の基本的な姿勢を明示することを真剣に考えていただきたいと思いますが、教育長のお考えをお聞かせください。

2点目に、駅南駐車場についてですけれども、これは先ほど竹島貴行議員さんは、除雪に対しての当局の取り組みについての質問であったかなと思いますが、私は、次の観
点に立って質問させていただきます。

駅南駐車場の有料化の現状と、積雪時における除雪体制や車両受け入れの体制について村長の説明を求めます。

舟橋村は平成5年に村に人口対策の一環として、駅周辺の活性化を図りたいとして、駅南側に無料駐車場が併設されました。以前は停車しなかった急行電車が利用者増で止まるようになり、駅舎整備に合わせて図書館も建設され、活性化を図ってきました。現在、この駅併設の無料駐車場は、村内外の通勤者にパーク・アンド・ライドの拠点として利用されております。村では無料駐車場が借地であることや、利用者の9割が立山町、上市町、富山市の住民であり、議会の中でも一般質問において十数年の間、無料から有料への検討について提案されてきました。そして7月の臨時議会でも有料化に関する条例を賛成多数で可決され、今まで無料で駅周辺の活性化を図ってきた駐車場を時代のニーズに合わせた公平性、受益者負担の観点から運営方法を見直し、有料化へと踏み切ったところです。9月1日から9月30日まで試験期間として1日1回100円とし、10月1日から有料化の本運用が開始され2カ月余りが経過しております。普通駐車が1回200円、これは午前5時から翌日の午前0時まで。定期券が1カ月3,000円、3カ月8,700円、6カ月1万7,400円、ただし図書館利用車に配慮され、普通駐車は2時間まで無料とされ、これまで順調に運営されていると聞いておりますが、住民の関心も高いので、有料化開始後の定期、月極契約の件数や一般車両の利用状況などについて御説明いただきたいと思ひます。

また、これから積雪時における除雪体制も利用者の方にとってみれば非常に関心があるかと思われまひす。除雪体制や積雪時の車両受け入れ体制などについて、また台数などについて村長の御説明をお願いいたします。

以上。

議長（中田文夫君） 金森村長。

村長（金森勝雄君） 5番竹島ユリ子議員さんの御質問にお答えいたします。

舟橋駅南駐車場につきましては、10月1日から有料化の本運用以来、大きなトラブルもなく順調に進んでいるところでございます。これもひとえに皆様方並びに関係各位の御指導のおかげだと思っている次第でございます。

さて、御質問ありました利用状況でございますが、12月1日現在では月極契約が19件、定期契約が141件と当初の計画どおりに進んでおるわけでございます。また、一般利用と申しますと契約外の方でございますが、1回200円徴収させていただいているわけでございますが、10月と11月の2カ月間の平均値で申し上げますと、月曜から金曜までの平日が1日当たり72.9台、ちょっと端数が出ておりますが、これも計算上の問題でございますが、利用されております。そして売り上げが1日平均1万1,235円、土・日・祝日では1日当たり69.2台と若干減っているわけでございますが、売り上げは1万975円となっておりますので、収支的にも予想をはるかに上回るレベルで推移していると思っております。

御指摘にありましたが、これから降雪期を迎えるわけでございまして、現在このように利用していただいている状況から、利用者の利便性を損なうことは非常にいかんことでございますので、舟橋駅周辺の駐車場及び駅南駐車場の進入道路の除雪に関しましては、従来から道路除雪として除雪していたわけですが、区別いたしまして専門の業者をお願いすることにしたところでございます。これによりまして、より迅速できめの細かい除雪が対応可能になると考えております。また降雪時に除雪車も入ることでございますので、駐車台数につきましては、2台ないし4台は減少するものと予測しておるところでございます。

今後とも、利用者の利便性をきちんと確保して渡すということを主眼にいたしまして、運営に関して努力してまいりたいと思っております。どうか議員各位の御理解と御協力をお願いいたしまして、私の答弁とさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

議長（中田文夫君） 塩原教育長。

教育長（塩原 勝君） 今年は「命」という言葉で締めくくられたように考えております。今、竹島ユリ子議員さんから出されました質問について、人間の幸せの原点ということで自分の考えるところを少し述べさせていただきたいと思っております。

なお、質問はもう答えとセットになっていて、これをどう思うかというふうに私はと

らえました。ということはすなわち、私は全く同感で、何一つ間違っているとは思いません。しかしながら、人間の幸せの原点ということは、いまだに哲学者にしてもわからないことであるということ的前提に、自分がいるんな先人から学んだことや、本を読んだことを何か自分のことのように言いますが、そういったことで勘弁していただきたいというふうに思います。

要するに、ほかの人から立派な生き方とか考え方を習い、少しでも自分を高めようとするといったことが非常に大切なことではないかということで、いろんな哲学者や宗教家が人間の生きる原点、幸せ、そして真理の探究ということをやってこられたことを少し引用させていただきたいと思います。

私は、紀元前6世紀あるいは5世紀に生きられた孔子、そしてその後でできた「論語」というものを、あいさつやいろんなことでかなり使わせていただいております。短い文章の一つ一つが、現代なお十分すぎるほど通用する示唆に富んだ内容を含んでいるからであります。そして、この方は「仁」というものを政治と教育の中に生かして、人の道、命の大切さを説き、人と強調して生きる大切さをいまだにたくさんの人の支持を受けて論語で述べておられるわけであります。

さて、ほぼ同じ、ちょっと遅れてお釈迦様が生まれられ、この仏陀様は「生きる」という苦しみ、そして「老いる」という苦しみ、「病」という苦しみ、そして「死」といった苦しみ、こういった煩わしいことから解放する、そういったことを説かれたわけがあります。そういった中でたくさんの仏教に分かれて、現在なお三大宗教の中の一つとして支持者がいるところであります。

それからちょっと遅れて、紀元前5世紀から4世紀頃ですが、ソクラテスが生きるための真の知恵を探して、それは「無知の自覚」である。要するに自分はまだまだ未熟で、もっともっと自分を高めようとしていく、それが生きる姿であると説かれたけれども、これはなかなか大衆から理解されず、最後は死刑に遭ってしまうわけですが、たくさんの弟子たちがおりまして、その中にプラトンがいました。プラトンは、認識、道徳、そして国家のあり方、宇宙論までも勉強して、現実を正確に把握して、「理想への接近」ということを唱えたわけであります。そして、アカデメイアという現在のアカデミーという言葉の発端を築かれて、学校の基礎となるものを組み上げて、組織的に真理を探究する、そして教育ということをつくり上げたわけです。

その弟子のアリストテレスは、しっかりとした学校を始め、学校というものはこのア

リストテレスによってつくられたといってもいいのではないかと思います。そして学問の位置づけ、論理学、自然学、社会学、芸術学、倫理学、政治学、史学、博物学、そしてこの時点で早くも「正しく豊かに生きる」ということを学問づけた人であります。

そして、紀元前4年から西暦28年にかけて生きられたイエスキリストさんは、まさに現代と何ら感覚の違わない「正義と慈愛」ということで、人類はすべて罪多いものである。人間というのは非常に罪多い動物で、「贖罪」という難しい言葉ですが、その罪を償って生きることが人間としての使命であるというふうに哲学されたわけでありませう。一切の偽善を排して、正義と愛の徹底を図ることをねらいとされた。

我が国に来ますと、もう一気に平安の785年になりますが、中国から帰った最澄は日本に仏教（天台宗）を広めて、この方は正しい生き方とか方向づけを逆に人間として戒めなければならぬことを中心に、こういったことをやると人間ではないですよ。あるいはこういったことをやったら好ましくないよということで、「大乘戒」ということで10の大きな戒めがあると。その中には殺人やひどい嫌がらせなどもみんな入ってくると思います。そのほかに48の軽い戒めがある。だから、この時点で人間としてこういうことをやってはいけないということを説かれたわけでありませう。

この天台宗からちょっと時代がたちますが、法然は浄土宗の開祖として「本願」ということで、本来の人の念願、正しい生き方という中で、苦難の生活をしている衆生（大衆）の救済を誓われ、人間がどう豊かに生きていくかということの研究されて浄土宗が開かれた。

その弟子の親鸞は、浄土真宗、阿弥陀仏の他力本願、全部煩惱を持っていると。百八つの煩惱と言われますが、大きな百八つの煩惱とともに何万の小さな煩惱を持っている人間というものは罪深いものである。しかし、この衆生の心身を煩わす妄念から解放することが、人間の幸せにつながる。善人が救われるのなら、悪人はますます救われるはずであるということで、過去は問わない、みんな悪いことをしてきたんだ。現時点で少しでもそういったことに気づくならば過去を問わない。本願を信じたら浄土に行けるといふこの浄土真宗は、今も大変支持が多くて、この前も法事に行ったのですが、私よりも大分若い女の僧侶の方が言われた人間の生き方に私も大変感心しましたが、やはりそれらは親鸞の説いたことを勉強して話されているわけでありませう。

さて、またさっきの論語にちょっと戻りますが、私は論語の中で、人間関係のことで、常に座右の銘といひますか、私が大切にしていることは、途中から自分が都市を重ねて

くる中で築いたわけではありますが、幼若な、幼くて若い人、あるいは後輩に対しては慕われる、頼られる、尊敬されるという人間関係をつくれと、そして同僚や友人には信頼される。あいつとならしっかりと友人関係が築けるとか協調できるとかいう、そういう信頼というものをつくる人間関係をつくりなさいと。そして年配者や先輩に対しては、安堵感や安心感を持たれるような人間関係をつくりなさい、そういった一説があります。

このように、私たちは自分よりも年下の者、あるいは自分と同僚、友人、そしてまた年配者というような3つの立場の人間関係があるわけで、そのそれぞれにおいて、いい人間関係をつくるのがいろんな問題関係を発生させないことであるということをお教えしたいと思います。

また、私は相当昔に、「子ども叱るな来た道だ。年寄り笑うな行く道だ」ということを聞かされたことがあります。自分も行き過ぎや失敗やスランプや、そういう幼い頃にそういったことで迷いながら来たので、順調に来たわけではないはずだ。だから今、子どもをもたもたしているとか何とかいって叱りつけるという教え方ではだめだということをおっしゃっています。そして、「年寄り笑うな行く道だ」、どんなに嫌でもどんなに頑張っても必ず歳はいく。そういった中で、年寄りにいずれは自分もその立場になっていくということで、自分が歳をいったときにしてもらいたいようなこと、そういったことは、やはり自分が現在、その年配者あたりに同じように思っつき合うということをおっしゃっているのだと思いますが、後継者があって感謝されている、尊敬されているというような気持ちを持ちながら、あと残された人生を本当に安心して生きていってもらえる、そういうように年配者につき合っていくということをおっしゃっていると思います。それがまたやがて自分に返ってくるということだろうと思います。

ちょっと話は変わりますが、倉敷の住職さんで、奥原曇龍という人が書かれた本を今年読みましたが、「宝とは道心なり」と話されて、「成仏は真の人間として徳を積むことだ」という見出しで、仏教などにおいて、修行の旅の中で、東へ東へと向かって旅をしながら、人間がどう生きるかを探る、この修行は、日の出始める方角で、万物の根源、無明の明かりのない闇を破って悟りの知恵を開く方角である。自分はなぜ人間に生まれしてきたのか、どう生きるために生まれしてきたのかを真剣に問い続ける修行だと言われ、自分を支えてくれる人、必要とする人、自分がしなければならないということをお自ら悟ろうとする修行である。そして、南へ南へと求道の旅を続けるのは、太陽が真っ赤に向いている方角で、人生をいかに完全燃焼するかを探るため、師のいる方角で南を指し

て「指南」という。「指南車」という言葉もこの言葉の端になっておりますが、「我以外、皆我が師なり」。謙虚に自分の生き方を、先人なりいろんな本や友達、あらゆる人から学ぶ必要性と人との協調性や、人間関係を学ぶ大切さを述べておられます。

そして最後に、阿弥陀仏が修行時代に法蔵菩薩と言われたときに、西へ西へと長い修行の旅をされたのは、真っ暗い世界に沈むことを求めてではなく、夕焼けの空のように赤々として光輝く命のふるさと、よくぞ私をこの世に送り出してくれたという、自分の生命のふるさとへたどりつくためである。だから、ここで自分の豊かで幸せであった人生を満足しながら心のふるさとへ戻っていける、それを真剣に探る旅であると言っておられます。

また私もほかに引用したことはありますが、大分古い本になりますが、作家の山本有三氏が『路傍の石』という本の中で、「たった一人しかない自分を、たった一度しかない一生を本当に生かさなかつたら、人間生まれてきた甲斐がないじゃないか」というふうに言うておられます。「自分が大切だからこそ他人も大切に作る」という考え方があります。

そういったことで、まとめになります、やはり教育でしっかりしたこのように正しく生きようとする、あるいは自分を高めようとする、そういったことを教育の指導の中にどんどん機会を多くしてやっていくこと、そしてまた、教えられることだけに頼るんじゃなくして、自らを考えると力をつける。そしてみんなで幸せというものを実現していくんだという、こういったことを定着させることが大事ではないか。ですから、自らの生き方を探ること、健康でたくましく、心豊かで幸せな人生を送る力を身につけること。そして、みんなで協調し合って、信じ合い、助け合い、生きていくこと、これが人間の幸せの原点であると私は聞いているし、考えております。

論語の中に、「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」と。孔子にして、なお、正しい生き方、豊かな生き方、幸せな生き方というものはわからない。自分がそれをもし悟れたり聞くことができたなら、もう思い残すことは何もないというふうにまとめているわけでありませう。

最後に蛇足になりますが、同じく論語の中に、弟子の「子貢曰く、君子亦悪（にく）むことありや。子のたまわく、悪むことあり」と言うております。君子もどんなに学問や人格を兼ね備えておっても、憎むという心は必ず出るんだと。そして子貢は自分は憎むのは人の言葉を我が言葉のように、物知り顔に話す。何か私のことを言っているよう

な気もしますが、傲慢を勇氣と勘違いしている者、隠し事を暴いて正義面をする者、子貢はこういう人を憎む。そして師の孔子は、他人の悪いところを言う者、上の者をけなす人、勇ましいばかりで礼がない者、一本気で心を開かない者、こういった者を私はどうしても憎むと。ですから、どんな人でも憎むという心は、人間持っている業であるといえますか、ただ、そこに違いは何であるか。それはやはり人そのものを憎むのではなくして、そういったことを憎むが、諭したり、教えたりすることのできる人間になることであり、また、憎まれることを根本的に持っている人間であるならば、やはり少しでも他人から憎まれることを少なくする努力、ですから本人にもいじめはそれなりの責任があり、その周りのそういうことを発生させる環境にも問題があり、そしてまた育てていかなければならない立場の人がいろいろと問題があっては困るというふうに考えます。

答えになったかどうか知りませんが、私の考えの一端を述べました。

議長（中田文夫君） 竹島ユリ子君。

5番（竹島ユリ子君） 先ほど教育長の答弁で、本村の教育現場では社会現象においての対応に子どもたちのために道德教育の中で積極的に取り組んでいる。これ以上の望みの対応に懸念されるように私は感じとったんですけれども、再質問していいかどうかと考えるながら、改めて再質問させていただきます。

今、抱えているような諸問題は私自身も思うんですけれども、家庭とか学校とか地域とかに責任を追及するものではないと思います。これは社会全体で考えなければいけない問題と私は考えているわけでございます。

そこで私は、次の家庭でのしつけと学校でのしつけの融合と基本的な姿勢を明示していただく観点から、質問、提案し、教育長の答弁を再度求めたいと思っております。

しつけには家庭生活を中心としたしつけ、そして学校でしつけられるのと2通りあると思います。その中で、やはりしつけに対しては、今言ったように家庭を中心としたしつけと、学校教育の中でしつけの指導書みたいものをつくっていただき、今後、児童生徒の様子や情報や意見交換をすることのできる環境づくりに一歩でも踏み込んでいただければと考える、私は、現在学校で取り組んでおられる保護者会なども定期的開催していただきながら、しつけの両面に立っての指導書などをつくっていただき、そのような家庭教育、保護者会の現場で、情報交換や意見交換をできるような環境づくりになっていただき、これからは学校で取り組んでいかれる問題に、一歩でも深く踏み込

んでいける環境につながっていけるのではないかと思いますので、その指導書の作成について、教育長はどのようなお考えを持たれるか、再度質問いたします。

議長（中田文夫君） 塩原教育長。質問に対して簡潔明瞭に答弁願います。

教育長（塩原 勝君） どうも失礼しました。

今言われたことについて、言い逃れをするわけではありませんが、実際のところ、十分やっただいているとは思っております。しかし、村独自で、あるいは村の教育委員会で作った指導書というか、チェック項目といったものはございませんが、文部科学省や県教育委員会等でそういう専門的なチームをつくって、常々いろんなものが来ます。そういったものをもとに、学校で合うようにしていただいてやってもらっていることはありまして、常に年に何回もそういったものが来るわけで、申しわけないですが、なかなかそれ以上のものをつくらうとしてもできないし、私たちはそういったものから、これなら村でできるというものを抜粋してやっているという現状であります。ただ、今言われたことについては肝に銘じて今後もその方向でやっていきたいというふうに思います。